

ずいそう

## 中年土木エンジニア 帰省する

高田 美仁



お正月の休暇を利用して、親子三代6人で伊豆の富士箱根伊豆国立公園にある大室山<sup>おおむろやま</sup>へ立ち寄りしました。

国の天然記念物にも指定されている大室山は、標高580mをわずか5分程度リフトに乗り、山頂へあがる伊豆の観光名所です。山頂からは、富士山はもちろん、相模湾に浮かぶ大島、伊豆七島から天城連山、箱根へ続く眺望を存分に楽しむことができます。この大室山は、直径300mのすり鉢状の噴火口を持つ休火山で、全山をカヤ（イネ科の植物）だけで覆われているため、眺望をさえぎられることなく絶景が望め、その散策コースはお鉢めぐりとも呼ばれています。

大学進学と同時に、実家を離れて以来、たいした親孝行らしきこともできず、若い頃には帰省すら疎かにしていたものです。私も親になり両親も年をかさね、今では年に3回、お正月、お盆、ゴールデンウィークを利用して、孫の顔を見せに何泊か実家に帰省することがせめてもの親孝行というのが恒例になってきました。

私の実家である静岡県三島市ですが、生活していた当時は何も面白いものなどないと思っていましたが、伊豆の玄関口ということで、近隣には多くの観光名所がある大変恵まれた場所であることにあらためて気づかされます。

また、そこに長く住む両親も、近いからこそわざわざ立ち寄ることもしなかった伊豆の観光地を、‘孫と一緒に足をのばして伊豆を楽しもうか’といったところでしょうか。そんなわけで、今回のお正月は大室山へとファミリーカーを走らせ向かいました。

しかし、今年は暖かく天気のよいお正月の真ただ中ということもあり案の定、車を駐車するのも一苦労…、山頂へむかうリフトを待つ人の大行列…。

80歳近い父親は大病したこともあり、車の乗り降りもままならず杖をつく体、リフトに乗り降りするのは、危ないし迷惑になるから山頂にはあがらないで下で待っているとのこと。母親も父親に付き添うからと山頂にはあがりませんでした。

家族サービスもしなければいけない私を気遣ったことでしょう。両親の判断もやむをえないと、両親を

残し親子4人でリフトを待つことにしました。

そのときリフトを待つ大行列の中には、犬を抱いた人がとても多いことに気が付きます。お正月に観光地まで一緒に連れてきてもらえるお世話が行き届いた可愛いワンちゃん達は、リフトを待つ時間をもてあました子供にはありがたいものでその場が和みます。そんな可愛いワンちゃんを抱いたままリフトに乗って山頂にあがっていく方が、たくさんおられる光景はなんとも滑稽で子供たちも時間を忘れるようです。

ようやく私たちの順番となり、雪化粧された富士山を背景に、新春の暖かい日差しをあびながら、ゆっくりとリフトであがります。

待ちに待った山頂は、想像以上の絶景！！360度の大パノラマが広がります。

お鉢めぐりといわれる遊歩道は、火口底を囲むように歩きやすく綺麗に整備されています。天空の中にある島でも歩いているような感覚です。

そんな遊歩道子供たちは目を輝かせながら駆け回り、先ほどのお世話の行き届いたワンちゃんたちも、あちこちで散策する姿はなんとも可愛らしく平和な国だと感じます。

私の子供も、「うちのピッピーちゃんも連れてきてあげたら喜んだらうな」などと言うわけです。我が家の14歳にもなる老犬です。もとは妻の実家で飼われていた犬ですが、我が家が引き取り子供たちもかわいがっているキャバリアという種類の犬です。

子供たちの目には、犬をリフトに乗せてお正月の富士山を一望しながら山頂を散策していることが羨ましいかぎりなのでしょう。

しかし私の頭には、絶景など臆気で下で待っているであろう両親のことが頭をよぎります。いつの間にかリフトに乗るのも困難になってしまった老いた父親と、当たり前前にリフトに乗って絶景の中、散策しているワンちゃんがいることに、何とも言えないやるせない気持ちと時の流れを感じずにはいられませんでした。

気づけば20年以上建設業に携わり、職業病でどんな場所に行っても土木目線で見ているものです。自然豊かな伊豆の観光名所には、峠や山岳、河川、海岸、



大室山と富士山

様々な地形があり、先人の土木技術の甲斐あってこそ、安全に楽しく観光名所や絶景にたどり着けるようになっていくことは言うまでもありません。

大室山の遊歩道も、高所であり休火山という特殊な条件にもかかわらず、景色と同様に人間にも動物にもとても優しい作りになっていました。つまりくようなものなど一切なく、景観もそこなわず自然になじんでいます。山頂に来ることができればバリアフリーの遊歩道が広がる人にやさしい山なのです。

大室山リフトは、係員に相談すれば車椅子を利用する人も乗車できるそうですが、山頂まであがるのに、体の不自由な方もその介助者もより積極的になれるよ

うな方法は他にないだろうか…今の土木技術で何かできることはないか…頂上に連れてこれなかった両親を想い、あらためてそんなことに思いをかけめぐらしましたが、現実味のある答えは見つからないまま。下山後、帰りの車の中で息子たちが多少なりともその絶景をおじいちゃんおばあちゃんに伝え、大室山をあとにしました。

インフラが整備された豊かな日本では、生活に求められることも多種多様化し、幸せの尺度も考え方も千差万別の時代にきています。また、社会情勢の変化に伴い、少子高齢化、環境保全、防災など、私たちの仕事に直結するさまざまな分野で多くの課題が生じていることも事実です。多方面からの意見や知恵を集約し、もうワンステップ上の優しい社会が求められている時代だということを今回の帰省にて肌で感じた次第です。

平和で優しい日本人ならではの考えに基づいた日本の土木技術は、世界に誇れるものがあり、さらなる発展を期待します。

私自身がそんな仕事に携わっていることを、両親にも子供にも、そろそろ胸をはり、誇りを持つ、そんなことを感じた今回の親子三世代旅行といったところでしょうか。

—たかだ よしひと 高田建設㈱ 常務取締役—